

将来の子供たちが共存共生のできる豊かで平和な世界へ



第三期を迎えて

代表 近藤秀二

私達のNPO法人としての活動は4月から第三期に入ります。本期は豊友会のメンバーのみならず、学生を始めとして若い人達、また女性特に主婦ボランティアの方々を募って足腰の強い組織を目指したいと思います。

国内ではミャンマーの少数民族の方々の自立支援事業を、末永く継続できるよう基金調達を行なってゆきます。認定法人の資格を取得できるよう、現在申請中であります。そうなれば皆さんや企業から寄せられる寄金

が税額控除となります。ミャンマー産品の輸入販売等も検討しています。

また「日本とミャンマーの子供たちの未来の為に」という会の理念にそつて、「東北大震災」で孤児になった子供たちの就学支援等にも予算を取りました。

一方ミャンマーでは孤児の人達をはじめ意欲的な若者のための職業訓練学校の設立を考えています。また孤児たちの奨学金や里親制度を設けてゆきたいと存じます。

今年度は2回のスタディツアーワークを予定しておりますが、11月は保育園の開所式や孤児院のコンピューター教室のオープニングセレモニー等があります。歯科医の先生方をはじめ30名近くで行くつもりですので、みなさま方の予定にも是非入れておいてください(11月19日から24日まで)。

皆様方のいっそうのご支援をお願いします。

(上記の写真は、ドリームトレインにて)

日本ミャンマー豊友会第3期方針

■活動基盤の拡大

保育園づくりの支援、孤児院への慰問など従来の活動を継続的に拡大するとともに、下記に掲げる職業訓練学校の設立などを視野に据えて、豊友会のみならず、一般の方々からの資金調達活動の強化を行います。具体的には、以下のアクションを計画しております。

認定NPO 法人の取得

JAMAHAMA が国税庁長官から認定を受けることで、個人・法人のみなさまが寄付金を行う際に税制優遇を受けられるようになります。認定NPO 法人を取得することで、社会的にも一定の評価(安心感)を得ることが期待されます。本年上半期中には、国税庁長官から認定を受けられるように活動を進めております。

募金方法の多様化、広報活動強化

インターネット上の寄付金受付(ネット募金)をはじめ、広く市民のみなさんから支援を得られるための工夫を行っていきます。それにともなって、JAMAHAMA の活動を多くの人に知っていただくために、リーフレットや会報、情報誌などを積極的に配布するなどプロモーション活動にも力を注いでいきます。

■職業訓練学校創設

ミャンマー国内に、職業訓練学校の創設を検討しております。

今年度は夏までに調査報告をし、今

■収入

正会員年会費	10,000 円 × 100 人	100 万円
賛助会員年会費	5,000 円 × 50 人	25 万円
賛助会員(団体)	10,000 円 × 20 口	20 万円
学生会員	1,000 円 × 50 人	5 万円
里親制度基金		100 万円
寄付金		300 万円
前年繰越		215 万円
合計		765 万円

期中には具体的に計画を策定し、来季中には何らかの形で職業訓練所を立ち上げます。現在、吉岡先生のジャパンハートが立ち上げているドリームトレインとの連携模索など、情報収集・交換を進めています。

■ミャンマースタディーツアー

本年も、11月に大規模なスタディーツアーを計画しております。より多くの人に、『直接』ミャンマーを体験してもらうことで、日本とミャンマーの歴史的関係、現代的意義、将来的展望を共有してゆきたいと思います。

■支出

職業訓練所立地調査費	50 万円	
里親制度給付金(6万円/人/年)	100 万円	
奨学金制度給付金	100 万円	
寺小屋、保育園設立支援金	100 万円	
紙芝居関連費用(ミャンマー語での制作も含む)	50 万円	
青少年のスタディーツアーへの参加援助金	100 万円	
「東北大震災」支援金	200 万円	
予備費	65 万円	
合計		765 万円

ミャンマーレポート

【京谷 和樹】(1990 年生 米国 リベラルアーツ専攻 在学中)

“君、両親いるの？”ドーピンの孤児院で出会った一人の大学生から聞かれたこの純朴な質問が、未だに心の奥に引っかかって離れない。好奇心のみでミャンマーへ向かった自分は、まるで想像もしていなかった問いにどう言葉を返して良いか一瞬戸惑い、沈黙の中、ただ“うん”と一つ返事しかできなかった。その時の彼の作り笑いを思い出すと、正直、明るい気持ちにはなれない。この青年との偶然かもしくは必然の出会いが自

分に、ある決意に至る勇気をくれた。

“同じ大学生がここまで大変な思いをして、自力で道を切り開き、夢を持って頑張っている。やりたいことをやらせてもらえる環境にいながら、自分はなにを暢気にぐずぐずやっているんだ？”“よし、今後一切の言い訳は無しだ。できる限りの努力では駄目だ。誰にも負けない努力をする。”

初めての発展途上国。人々、何か大変な思いをしている人のために

なることがしたいと言う思いがあり、今回の研修がそのための貴重な一步になることを期待していた。実際に肌で現実を感じること、それが自分のテーマだった。初日のミャンマーは雨。日本での震災も気にかかりながら、すっきりしない始まりとなった。少々くらい雰囲気の中、生まれて初めて孤児院というものに訪問した。場所は、ウイッタカ孤児院。第一の印象は、その外装であった。衛生状況が悪いのでは。アメリカの美しいキャン

パスを見慣れた自分には、少々信じがたいものがあった。そこで暮らす孤児達は、どことなく元気が無いように感じた。彼らを見ていて思ったのは、みんなどんな気持ちで毎日過ごしているのだろう、何か将来に向けて明るい夢や目標を持っているのかな？ということだった。同情のような気持ちがうまれた。そこで自分は、高校時代を思い出していた。初めての親元を離れての寮生活。自分の場合は、永遠の別れではなかったものの、とても寂しかったのを思い出した。その想いが彼らへの同情心をかき立てたのだろう。晴れない気持ちのまま、孤児院を後にした。

次に訪問したジャパンハートの孤児院で受けた印象は、ウイッタカの孤児院で受けた印象と全く違う物だった。とても笑顔の多い明るい孤児院だった。何がこんな違いを生むのだろうと考えてみたが、一つ思い浮かんだのは、ジャパンハートの孤児院では、子供達のお世話をする方々が温かい笑顔をもたれた女性の方々だった。それと比較的、係員一人に対する子供の比率が小さいように感じた。それだけ、子供一人ひとりに注いであげられる愛情が多いのだろう。幼い時期の、母親の愛情の大切さを感じた。その後に訪問したタウンジー・ハイポー幼稚園、インレーのユウマ幼稚園でも同じことを感じた。ミャンマーの子供達とふれあってみて、改めて何かこの子達のためになることがしたいと素直に実感する一方で、では自分には実際に何ができるのだろう、今の自分に何かできるのだろうか？と自分の無力さを痛感した。そし



市で薄れ始めた心の温かさを感じた。

ミャンマー研修も終わりに近づいたころ。最後の研修地であるミッチーナからヤンゴンへ戻るのに、らしくないさびれた空港で荷物検査を受けた直後のこと。荷物検査をした政府の役

人が、チップを要求してきた。何で荷物検査にチップだ。そんなのただのかつあげだ。そのチップの額は農場で汗を流して必死にその日を生きている方々の日当に値するか、少し多くらいだ。こんなのが間違っている、こんなことが続くはずが無い、続くべきでない。正直、本気で腹が立った。空港の滑走路脇では、銃を構えた兵士が数名、何か監視している様子であった。言いようの無い憤りを感じながら、ミッチーナを後にした。

(終わりに)

近藤さん、ミャンマー豊友会の皆様、末筆で失礼します。今回は、大変お世話になりました。上手くまとめられせんが、これから思いを巡らせるにふさわしい新しい課題が多く見つかった研修でした。簡単に答えの見つかる課題ではありませんが、それでこそ考え方斐があります。今回の学びのチャンスをくださった皆様に深く感謝致します。僕にとっては、ミャンマーという国からは言うまでもなく、人生経験の豊富な皆様と一緒にさせて頂けたことも同等に貴重な経験でした。今後も皆様とのご縁を大切にさせて頂きたいと思っている次第でございます。どうぞよろしくお願ひします。誰にも負けない努力で世界にポジティブな変化を生み出せる人間にあります。ありがとうございました。

ミャンマー見聞録

立石 安廣

■ 3 月 16 日

東北・関東大震災の被害の甚大さが徐々に明らかになる中での少し気の重い出発となつた。

ミャンマーは、軍事独裁国家で民主化が進んでいないとも言われているので、何となくテレビで放映される北朝鮮の街や人々とミャンマーのイメージが重なっていた。

タクシーの中で『ミャンマーへ行くのですか、大丈夫ですか、何でまたそんな所へ』と言われた。旅行本によればそうでもなさそうだ。どんなところだろうかと考えているうちに現地時間 18 時 56 分(日本時間 21 時 26 分) ヤンゴンに着いた。

真っ赤な夕日と灼熱の大地をイメージしていたが、季節はずれの雨で気温も低く梅雨時期の日本のような感じであった。

空港はこじんまりしていて少し暗い印象を受けた。空港からホテルまでは街路樹の緑が濃く、煙るような雨の中に商店の明かりと活気に満ちた人の群れが見えた。ミャンマーの第一印象は、とにもかくにも緑が多いことであった。

10 日間の旅では、国土、自然の広大さと豊かさ、人々のバイタリティ・優しさ・穏やかさ、からこの国の潜在力の大きさを感じました。また、ここで孤児、少数民族の人たちなど恵まれない人のために活動している日本人がいることを知りました。こうした活動の積み上げがミャンマーにおけるプラスの「日本像」を創っていると感じました。

■ 3 月 17 日

ミャンマー 2 日目も雨、3 月は初夏で普通なら 36 度位になるとのことであったが、暑くはなかった。

【ウィッタカ孤児院訪問】

1. 孤児院の概要

収容者 150 名、当日は 70 名の孤児が残っており、孤児たちは身の回りのことは自分たちでやっているので当番を除く 45 名が私たちを迎えてくれた。

2. 實施した活動

子供たちに日本から持参した紙芝居を見せ、今後自分たちでも紙芝居を作つて日本の子供たちの作ったものと交換しようと提案した。

日本ミャンマー豊友会からの寄付金と文具等のお土産を手交した。

3. 特徴

同孤児院は尼層が数名の孤児の世話をしたことが発端、愛知県の女性が寄付したことにより多くの孤児受け入れができるようになった。その後、日本ミャンマー豊友会が引き継いで支援(毎年 3・11 月)、他からの支援もあり規模(コンクリート造)も大きくなり小学校も併設されていた。なお、小学校には地元の子供たちも通うようになったとのことである。

《聞取りメモ》

孤児が多い要因は、内戦により両親を失った(ミャンマーには 135 の民族)、両親が HIV、兄弟が多い→棄てられる→孤児院とのことである。

維持費は 1,500 ドルあれば 150 名を 1 カ月養える。(1\$ ≈ 85Y → 1500/150=10\$ → 850Y → 1 人 1 カ月 850 円)

孤児の服装は日本の子供と変わり

なかつたが頭に皮膚病がある子もいた。これは栄養のバランスが悪いことが要因とのことであった。

【ジャパンハート孤児院訪問】

1. 寄宿寮の概要

- ・ジャパンハートが設立運営
- ・ジャパンハートが設計した施設は明るく開放的
- ・シャン州の少数民族の 4・5 ~ 15 才までの子供 55 名(男女半々)を受入れている。ビルマ語が話せないのでビルマ語を教えている(小学校入学の準備)。

- ・収容規模を 200 ~ 1,000 名に拡大する準備をしていた。

2. 實施した活動

ウィッタカ孤児院と同じ(紙芝居、寄付等)

3. 特徴

- ・里親制度

55 名全員に里親が付いた。里親は食事、教育、職業訓練費を含めた費用 年 5,000 円 × 12 月 = 60,000 円を負担する。

- ・孤児の自立支援(職業訓練)策縫製、マニュキア、ファッション、医療、溶接、電気等個人の特性に合わせた訓練をする。

- ・自立促進

30 年間はジャパンハートがサポートし、その後はミャンマー側に移譲する。

【ジャパンハート孤児院建設予定地視察】

ジャパンハートが孤児院建設のために取得した用地を視察した。

ヤンゴン空港 → ヘーホー空港

- ・ロペラ機で座席は片側 2 席の自由席制で満員であった。窓の下は初夏の光と熱で霞んでいるが大きく蛇

行する河（イラワジ河？）、湖、遙か西方には雲海と高い山が見えた。

山の尾根、谷、沢に人家が点在しているのが見えた。

ヘーホー空港は停電で真っ暗闇であったが、真っ暗闇の中で荷物を受け取りバスに乗った。バスは「せとうち観光」の大型バスで日本にいるような気になった。

宿泊は hupin Inle khaung cottage で今回の旅では一番よかったです。

■ 3月 18日

時差もあり3時半頃に目が覚めた近くの集落で飼っている軍鶏は5時前15分頃に鳴いた。鳥は日本もミャンマーも朝早く鳴く。インレー湖と周辺の集落を散策した。

集落の家は立派なものではないがヤンゴン郊外ウイッタカ孤児院周辺にあった竹などで造った掘っ立て小屋のようなものではなく、家の回りや道にもゴミが落ちていることはなくきれいであった。

【タウンジー・ハンポー保育園開所式】

「せとうち観光」の大型バスでタウンジー・ハンポー保育園へ向かう案内役は「地球市民の会」の柴田さんとミャンマー国境省の役人、国境省の役人が付いてくるのは行き先がパオ一族の住む地区であり、政府との関係が微妙であるから想像した。

途中にはワイナリーもあり、タウンジーは英国のなごりがあつて美しい街であった。タウンジーから先はまさにミャンマーの秘境を行く趣で幾つものパオ一族集落を通っていった。ミャンマーの道路脇にはゴミが散乱しているが、パオ一族の集落はきれいに掃除がされていた。

保育園は日本ミャンマー豊友会の寄付によりつくられたものでパオ一族の喜びが感じられた。パオ一族の拠

点である僧院で幹部が集まって我々の到着を待っていた。

パオ一族の代表から地震に対しうお見舞いの言葉をいただいた。また老婆からはあなたたちの「安全を祈った」と言ってもらった。

紙芝居、文具・寄付金手交

食事に招かれた。食事するのは我々だけでパオ一族の方々は控えて見ているだけなので早めに切り上げた。

帰りには大量のバナナとニンニクを土産としていただいた。

【ティム瞑想センター】

帰路、瞑想センターに寄り瞑想を体験した。腰の痛さのため、雑念を振り払って瞑想状態に入るには至らなかつた。

■ 3月 19日

【ユウマ幼稚園予定地見学】

インレー湖を船外機付の舟で約40分南下し、首長族もいる水上マーケットで下船し、シャン族の村立の幼稚園を見学した。ここでも同村の医師から地震に対してのお見舞いの言葉をいただいた。

幼稚園予定地を見学し、幼稚園建設委員会のメンバーに建設資金を手交した。

昼食のもてなしを受けたが、パオ一族と同じで村の人たちは見ていいだけ。

ヘーホー空港 → マンダレー空港

今日は停電していなかった。席は自由席であった。気温が高く水蒸気のためか下の景色はよく見えなかつたが、マンダレー盆地は非常に広大で驚いた。

マンダレー 400m からピンウエイン(メイミョウ) 1,100m へ向かう、70km、標高差 700m を2時間かけてネムの木などの大木に覆われた街道を走り

に走った。虹の松原の松を巨木にしたような道を2時間、日本では見ることができない景色であった。

宿泊は THIRI WYING HOTEL。英國のコロニアル風の国営ホテル、蟬が鳴いていたが日本のとは鳴き声が違つた。

■ 3月 20日

【ドーピン孤児院訪問】

1. 孤児院の概要

収容者 1,050 名（孤児 1,000、親有り 50）1 年で 300 名増えた。12 民族の子供たち、30 年前に開設した。内訳は

- ・小学校前・小学校（450 名）
※施設内で学習
- ・中学（350 名）※ 施設内で
- ・学習高校（140 名）※ 高校近くの信者の家から通学、食料は届ける
- ・大学（110 名）

2. 実施した活動

ウイッタカ孤児院と同じ（紙芝居、寄付等）

3. 特徴

運営は坊主 13 名、小坊主 30 名、大卒者が手伝いにくる。

米が不足するので 300 村へ托鉢（米、野菜、お金）にいく。子供たちに不安感を与えないように子供たちの居住場所に米袋を沢山置いていた。

450g(3 合) × 1,000 名 × 300 日
= 135t = 2,250 表（仮定による試算）

月 300 万 K 必要である。（学費、医療費他）

食事は寄付がないときは、米とトウガラシ入りのスープのみ、寄付があれば副菜が付く、食事は 5 ~ 6 名の子供たちが粗末な器具で作っていた。

1 人当たり 1 合の米を食べる

と仮定すると $150g \times 1,000$ 名 = $150kg=2.5$ 表分の米を毎食炊いていることになる。調理場所を新築することであった。

パソコンの教育施設が完成していたが、パソコンは 2 台しかなかった。

【旧日本軍戦跡巡礼】

陸軍墓地

大きな石碑には屋根が掛かっていた。ミャンマー人の僧侶が管理してくれているとのことであったが会えなかつた。

場所は通りから奥に入った畑が広がる丘陵の一角にポツンと建っていた。歳月の経った卒塔婆が 6 枚程あつた。般若心経をあげ、冥福を祈つた。地元の人が案内してくれた。地元の案内がないと行けないと行けないところになってしまつてゐる。

旧陸軍第 15 軍司令部跡

・インパール作戦を命令した司令部跡は住宅地となつていて痕跡を見つけることはできなかつた。

牟田口司令官旧宅

・針灸院として活用されていた。

旧陸軍病院跡

・そのまま小中高校として活用されていた。土台、壁のレンガはそのままであつた。

ピンウーイン（メイミヨウ）からマンダレーに戻る。

【マンダレーヒル観光 マンダレー王宮、マンダレーヒル】

イラワジ河の果てに沈む夕陽、その先の西の方はインパールか、反対側の夕焼けに映えるピンウーイン（メイミヨウ）とその奥のシャン高地が印象に残つた。

■ 3 月 21 日

【ジャパンハート ワチエ病院訪問】

マンダレーから車で 2 時間、イラワジ河の河畔に建つワチエ病院は吉



岡医師と献身的な日本人スタッフによって運営されている。吉岡先生は東北の被災地に行っているため不在であつた。病院は僧侶の病院と同じ建物の中にある。地区では唯一の病院である。

日本と比べものにならない厳しい環境下で活動されている方々に心から敬意を表さねばならない。

1. 病院の概要

日本人医師 3 名、

日本人看護師 2 名

外来は 1 日平均 30 名

やけど、できもの、甲状腺など、

3 日かけて来る患者もあるが、体力のない人は来ることができない（治療を受けられない）。

重症患者には日本の薬を使用する。

2. 入院費用

18 歳以下は無料、18 歳以上は 1 日 500k

現地職員には若干の給与が支払われているが、日本からの研修生は研修費を支払って活動に参加している。

3. 実施した活動

ウイッタカ孤児院と同じ（紙芝居、寄付等）

■ 3 月 22 日

飛行機でマンダレーからミッチナへ

移動。ミッチナは、大戦時北ビルマの要衝で軍民約 5,000 名の日本人がいた激戦の地であり、イラワジ河の中洲には死守命令に背いて撤退命令を出した水上源蔵少将の自決した場所がある。舟をチャーターして渡つた。

イラワジ河は河の水路部分が 1,000m 以上あり、流れも速く長さ 10m 幅 1m 強の木造舟に 7 名も乗つたので、少しでも揺れれば即転覆、全員死体も揚がらないこと間違いなしの大冒険であった。当然誰も救命胴衣は着けていなかつた。非常に怖かつた。

中州のスイカ畑を横切つて 150m 程行つた所に大きな菩提樹があり、少将はその樹の根元で割腹自決していたとのことである。67 年前に起こつたことを示すものは何もない。英國軍の追及を逃れ、当地の老婆に匿わっていたそうである。少将がいなくなつたので老婆が探しにいって発見したとのことであった。

その畑の農家が保管している古い卒塔婆をもつてきてくれたので般若心経あげ冥福を祈つた。

■ 3 月 23 日

ミッチナから西の方に車で悪路を 2 時間行くと、第 2 次大戦の末期に援将ルートとして有名なリド公路が北

の方インドに向かっている地点に着いた。そこを西に曲がり更に1時間行ったムーガオ村の戦闘で日本兵が500名亡くなつた。京都の辻口寛氏が寄進したパゴタがあつた。般若心経あげ冥福を祈つた。

負傷した日本兵はシャン族、カチン族に保護されたそうである。仏教の影響かこの地区の人々は我々にも好意的に接してくれた。日本の兵隊を弔うパコタや慰靈碑がミャンマーの各地にあり管理が行き届いているのも仏教の影響なのだろうか。こんな国は他にない。「私たちはミャンマーに感謝しなければならない」と思った。

|ミャンマーをひとり旅して|

微笑みの国『ミャンマー』

大木 光章

5月の18日から一人ミャンマーに行って参りました。

目的は、蓮糸の強度改良糸の試作・蓮織物の柄織り技術指導及びサンプル加工依頼と『たいやき』プロジェクトの市場調査です。

蓮糸の織物については、蓮糸の特徴である『ぬめり(植物のカシミヤと賞賛される感触)』を残しながら糸の強度を補強する試作及び技術指導です。

大きな目的は、蓮糸製造する農民が独自の技術で価格設定出来る状態を創り出す事にあります。今のシステムは、高額な蓮織物が売れても豊かになるのは一部の織元だけで現場の農民は、本当に貧しい状態です。だから蓮織物(蓮糸)を売れれば農民達が潤う農民主体のシステムを構築し、農民が貧しいがゆえに、子供達を『身売』する事の無い状態にしたいとの思からです。

【国境省運営寄宿舎】

パオ一族地区へ同行した国境省の役人が国営「職業訓練学校」だと紹介してくれたが寄宿舎であった。概要は次のとおり

- ・資格 中学1年(10歳)の孤児か少数民族(ビルマ族は不可)、試験はなし。

入寮契機 ここを知っている親、村人が連れてくる。国側が募集していく。95名が在籍、市内の学校に通学、高校まで可、優秀な人は大学に行く。食費・学費・制服は無料、それ以外は寄付による。

小遣は中学生600k、高校生800k/月

高校2年の生徒(インド近郊のナガ

族)は「ここに来てよかったです」と語った。

■3月24日

飛行機でミッチナからヤンゴンへ、工場団地見学

三井物産が50年の借地権を得て開発、東京インタープライズが引継いで今日至る。

日本人墓地

19万の日本人がミャンマーで亡くなつた。

ヤンゴン市内を観光

■3月25日

シュエダゴォンパゴタはじめ市内を観光



蓮の茎を収穫する農民



蓮の糸を紡ぐ農民



朝市に物を運ぶ農民

そのシステムで蓮糸生産、蓮織物を貧しい農民(少数民族)の産業として育成出来るかの調査及び検証作業です。又、『たい焼きプロジェクト』は、孤児たちが義務教育を終えた後に(孤児院を卒立つ時)自立出来る仕事作りとして取組です。既存のシステムを崩さない様な独自のシステム構築する事で子供達の将来に光を当てる取組です。このように当NPOも金銭支援から人作りの支援に変わりつつあります。本当にミャンマーの人たちが必要としている支援とは何かを模索しながら活動を行っておりまます。そしてこの活動を通じて日本の子供達(青年達)が何かを学んでいただければ結果的に日本国のためになるのではと思っています。

次にミャンマーの田舎の村で必ず体験出来る『微笑みの洗礼』について書かせていただきます。スタディー

ツアーに参加された方は、経験されたと思いますが地方の村では、『ミンガラバ』と声をかけると必ず『微笑み』帰ってきます。(残念ながらと都会?は、事情が違う場合もある)

あの『微笑み』は、何だろーと何時も不思議でなりません。

シャイなのか?はたまた こちらが日本人だからか?-----?

皆さん一度、実際に体験してみてください。

朝、村に出て『ミンガラバ』と声を掛けてみてください。

遠い昔の日本がそこに有るような穏やかな気持ちにさせてくれます。

あの『微笑み』は、何だろ?『微笑み』の根底には、やはり仏教の教えが息づいて居るのだろうと上座部仏教について興味が出てきました。

次は、ミャンマー人と上座部仏教について調べたいと思います。

平成 23 年度 11 月ミャンマースタディーツアー旅行日程

日	日程		
11月19日 土曜日	名古屋国際空港集合9:00 TG645 NGO 1100--BKK1545 (東京TG6003 11:45発～バンコク着15:25) (福岡TG649 11:40発～バンコク着15:35) (大阪TG673 11:45発～バンコク着15:20) TG305 BKK 1755--RGN1840 BKK空港にて集合 ParkRoyal Hotel or Chatrium Hotel		
11月20日 日曜日	ホテル8:00出発 シュダゴンパコダ見学 W9 115 RGN 1100--HEO1210 日本財団Dr.ウーミンサン氏の講演 タウンジー パオ族代表講話、パオ族交流会 ホテルにて夕食及び柴田さんの講話(地球市民の会) 湖上ホテル HuPin Inle Khaung Daing cottage		
11月21日 月曜日	ホテル7:00出発 湖上朝市 インレー湖ユワマ保育園開園式 インレー湖観光 W9 120 HEO 1625--MDL1655 Mandalay Sedona Hotel or Mandalay Hill Resort 又はメミューホテル		
11月22日 火曜日	ホテル8:00出発 メミヨ日本人墓地 参拝 メミヨ ドービン孤児院(パソコン持参) ワチエ病院(ジャパンハート)院内見学、慰問、紙芝居上演及び絵本寄贈、吉岡ドクターのお話。 Mandalay Sedona Hotel or Mandalay Hill Resort		
11月23日 水曜日	ホテル8:00出発 マンダレー(ミャンマー)観光 W9 252 MDL1335--RGN 1500 ヤンゴン市内 観光 及び買い物 夕食会 ParkRoyal Hotel or Chatrium Hotel		
11月24日 木曜日	ホテル 8:30出発 ヤンゴン市内 ウイッタカ孤児院訪問 ジャパンハート ドリームトレイン孤児院訪問 ヤンゴン市内 観光 TG306 RGN 1940--BKK 2135 (東京TG6002 23:55発～成田着08:10)		
11月25日 金曜日	TG644 BKK 0005--NGO 0735 (東京行TG2350 00:20発～東京着0810) (福岡行TG648 00:50発～福岡着 08:00) (大阪行TG6934 00:20発～大阪着07:55)		

※パオ族代表の講話を予定しておりますので代表方の都合で日程が一部変更になる可能性もあります。

※旅行代金は、食事込み18万円程です。(早期予約すれば航空運賃が安くなりますので確定しましたらお連絡いたします。)

※ビザ申請料3000円 申請代行料は、別途必要です。

《申込書》

参加者氏名

携帯電話

参加者住所

TEL&FAX

e-mail

職業

書類送先 参加者 会社 その他希望先／

会社名	会社住所	TEL&FAX
搭乗空港名 東京 名古屋 大阪 福岡	ビザ申請	個人対応 旅行会社委託
緊急連絡先	保険加入	個人対応 旅行会社委託

備考(希望事項) 前後日程変更希望の方は、ご連絡下さい。

お問い合わせ・お申し込み／相互タクシー(株) 観光事業部[担当:武藤・長田] FAX 073-473-6266

※締切は、2011年10月中旬。※早めの申込をお願いいたします。



〒 442-0826 愛知県豊川市牛久保町城下 73 番地 (大木産業株式会内)
Tel. 0533-85-3358 Fax. 0533-85-4986 e-mail : jamahajapan@gmail.com
<http://www.hoyukai.com/myanmar/>